（別紙２）

審査の結果の要旨

氏名　矢口直英

フナイン・ブン・イスハーク（877 年没）はギリシア学術の中東地域への移植に大きく貢献し、イスラーム史上最大の翻訳家として知られている。しかし、その医学者としての貢献については学問的な蓄積が充分ではなく、評価が確定していない。そこで本博士論文の著者が目指したのは、イスラーム世界で医学の入門書として広く利用され、中世ヨーロッパの大学においてはガレノス医学の教科書とされたフナインの『医学問答集』を分析することによってギリシアからイスラーム圏、ヨーロッパへと展開する医学史の中にフナインを位置づけることであった。

『医学問答集』成立の背景を考える際に考慮しなければならない主要文献としては、ガレノスの著作選集である「十六書」、その影響下で成立したアレクサンドリア集成がある。また、『医学問答集』にはフナインの甥であるフバイシュによって書かれた箇所も存在するが、フナインとフバイシュそれぞれの執筆範囲については見解が分かれているという問題、そのアラビア語版とシリア語版がどのような関係になっているのかが確定していないという問題が存在する。このような問題意識のもと本論文は、まず I 章では伝記資料に拠ってフナインとその一派の活動を、II 章では『医学問答集』の構成や先行医学文献を概観する。続く III 章では、同書と、「十六書」やアレクサンドリア集成の対応箇所を逐一比較する作業を通して、同書の記述の典拠を確定している。IV 章では『医学問答集』のアラビア語版、シリア語版、ラテン語版の文言や構成の特徴を描き出す。この二章を通じ本論文は、『医学問答集』にはアレクサンドリア集成にも、またこれまで「十六書」と認識されてきたガレノス文献にも帰属しない資料に由来する部分が存在すること、シリア語版がアラビア語版に先行すること、フナインとフバイシュの担当箇所は従来言われてきた諸説よりも遙かに複雑であり、前者の担当箇所がラテン語版の形成に結びついていることを結論として導き出す。さらに V 章では、自然精気、非自然要素という二つの概念を取り上げ『医学問答集』が後世のイスラーム医学に独自の影響を与えたことを論証する。そして最後に、『医学問答集』全訳と同書各言語版の相違箇所一覧を付している。

ギリシア語、シリア語、アラビア語の表記や用語、解剖学上の理解、写本の調査とその活用など問題点は幾つか指摘されたが、9 世紀までの医学教育の未解明な部分を解明することにより、古代ギリシア医学を継承し、後世のイスラーム医学と中世ヨーロッパ医学へと連なるフナインの医学史上の貢献を具体的に明らかにしたという点において、審査委員会は本論文が博士（文学）の学位に値するものと判断する。